



最近ではロボットやAI（人工知能）技術の導入に関するニュースを見かけない日はないほどです。自動運転車に関する企業の開発競争。法整備も遅れまいと急ピッチで進んでいます。また、製造工程を完全自動化する無人工場、接客店員のいないファストフードや小売業界へのロボット・人工知能の広がりなどが、どんどん実用化され、利用されるようになってきました。多くの記事は「技術の進歩はすばらしい」といったトーンで技術革新や

枝廣淳子の 賢者に備えあり 早い対応策が必要な ロボットとAIの時代

その実用化を報道していますが、私は読むたびに「これによって何人分の雇用が不要になるのだろうか?」と思います。

マーティン・フォード著『ロボットの脅威―人の仕事がなくなる日』(日本経済新聞出版社)によると、製造業の強い中国では、ロボット技術の普及ですでに製造業の労働人口の一五%、一千六百万の雇用を失っており、「2013年の中国の新卒者はおよそ半分しか職にありついておらず、前年の大卒者の20%以上もまだ就職できていない」状況とのこと。

先進国で大きな打撃を受けるのはサービス部門です。同書が「高いスキルを要しないファストフードや小売業の仕事は他にほとんど行き場所のない労働者にとって、民間部門における一種のセーフティネットとなつてい」と指摘している職場が、ロボットやAIの活用によってどんどんと失われていきます。

このような動きを見てみると、この十年間、上位1%の所得が一八%増加したのに対し、中流層の所得はなぜ下落しているのかが分かります。ロボットやAIを所有する資本家はますます富み、他方、ロボットに仕事を奪われる、または給与も休みもなく不平も言わず働くロボットとの競争を強いられる労働者はますます不利な立場に置かれるようになっていく……という構造なのです。

「自分はホワイトカラーだから大丈夫」と思っていたのは過去の話のようです。

現在では、「プログラム統計分析を行って、試合のあいだに起きた注目すべき出来事を見定める。そして特に重要なプレーやストーリーに不可欠なキープレーヤーに焦点を合わせながら、試合の流れ全体を要約する自然言語のテキストを作り出す」テクノロジが、三秒に一本のペースでスポーツなどの記事を自動的に生成し、「フォーブス」誌などの一流メディアに使用されているそうです。

最近、日本でも「AIが自動で運用するファンド」ができたという報道がありました。ファンドの運用は高度な専門家しかできない

仕事だと思っていました……。ほかに、マーケティングや経営判断など高度な教育を受けたホワイトカラーの専門職しかできないと思われていた頭脳労働も、どんどん自動化の対象となりつつあります。

これまでも、農業の機械化やオートメーションとグローバル化による新しい技術が雇用に影響を与えることは多々ありました。それでも「労働者にさらに教育と訓練を受けさせることで、新たな高スキルの仕事に就けさせる」対処法が効果を発揮してきました。ところが、今はルーティン労働が機械に取って代わられるだけではなく、高スキルの仕事の多くもコンピューターに取って替わられつつあります。「教育と訓練」は雇用喪失解決の切り札ではなくなりつつあるのです。

そういった時代になっても、持続可能な幸せな暮らしや社会を成立させるにはどうしたらよいのでしょうか。どれほどの人がこの問いに真剣に向き合っているのでしょうか。

先日、AIの解説記事に「言葉の理解が可能になれば、AIがホワイトカラーの多くの業務を支援・代替できる。今後の技術開発が期待される」とありました。資本家にとっては、期待されるのでしょうか。しかし、働く人や社会そのものにとつての意味するところは、どうでしょうか。国も社会全体もしっかり考え、教育の目標の転換も含め、早く手を打っていく必要があるのではないのでしょうか。

(東京都市大学教授/幸せ経済社会研究所所長)